吹田市佐井寺　風土記こぼれ話（二）

編集部

前の15号で15伊藤發子さんよりご紹介頂いた「吹田市佐井寺　風土記こぼれ話」本文を今後数回に分けて掲載致します。なお、20淺野倉平さんに全面的な協力を頂きました、掲載の現況写真と説明は淺野さんのご提供で執筆後五十年の時の流れを感じます。伊藤さん、淺野さんのお二人には改めてお礼申し上げます。

「こぼれ話」が成るまで

藤井久義

去る三十三年四月、当市社会教育課主催による、第一回市民ハイキング行事以来いつも参加している。現在は「クリオの会」と改称した。

以後毎回の遺蹟踏査の積み重ねのお陰で、今日までに図り知れないものを得て行事は今もなお続いている、私は市当局のこの企画に対して深く感謝している。

この参加会員は、当市各地域に渉っているので、主事、中村先生は「各自それぞれの地域に残っている口碑、伝説、遺蹟等を三十五年八月末日までに、提出するように・・・」と促されたのがそもそもの始まりで、古老達から種々の話を聞かせてもらったり、偶然の機会にヒントを得たり、実地について調べたり、写したりして、脱稿のすんだものから順次先生に手渡した。

いよいよ書き始めると、この町に残しておきたい事柄が、今まで予想もしておらなかった世界が、次から次へと現れ、私の脳裏を往き来して、このまま放置しておけば、いつかは消えてしまうであろう史実伝説を（誰からも頼まれはしないけれど）佐井寺の将来のため、住民の方々のために、万難を排して、是非とも書き残しておかなければならない・・と心に決めた。

啖呵は切ったものの、内容は貧弱の上に、二十数項目に分れて細切れとなり、重複がかなりに目立ち、間違いも多かろうと思うので、どうぞ御叱正御助言下さることをお待ちしている。

当市でも幾年か前に「郷土吹田」を発行され、市大助教授、亘節先生執筆の郷土史編は唯一とも言える貴重な文献ではあるが、当佐井寺についての記事は、殆ど見当らなかったように記憶している。

当佐井寺地区以外でも、未発見の遺蹟伝説等はまだまだ多々ある筈である、市当局が第二次郷土史を編纂される時には、我々の意のあるところをお汲みとり願い、ささやかながらこの編中から、拾って頂けるものがあれば、検討を加えて頂いた上でご採用下さることを願ってやまない。

次にまた私ごとになるが許していただきたい。

たしか大正六年頃であったかと思う、前京大教授中村直勝先生、今は故人となられた、元京大教授魚澄惣五郎先生、元龍谷大学教授粟野秀穂先生（が主幹となられて）他若干の先生達が、史学地理同好会を結成され、南の御堂さんで第一回会合を催された時から、毎月一回の会合と史蹟踏査の会には欠かさず参加し、何も知らなかった私に、どれだけ実際に即した知識と、豊富な体験とを得たか測り知れないものがあった。

けれども家計の都合上、数年後には参加出来なくなってしまった。

私が曲がりなりにもこの「小冊子をまとめてみよう・・・」と志すようになった遠因も、ここら辺りに含まれているのではあるまいか。

さて「クリオの会」の名称であるが、「クリオ」は歴史を司る女神（ミュウズ）である。

「クリオ」は九人の姉妹の神々の中で、いちばん内気で、しかも創造力に富んだミューズであった。この名称は、大阪市大教授理博渡辺正先生が名づけの親である。

我々は遺蹟探求を主眼とするグループであり、永い間親しまれてきた「市民ハイキング」は、健康的な明るい名称ではあるけれど、誤解され易いところもあるので、改名したことを改めて附記しておく。

（三九・九・二）

山田寺＊内「下馬」門碑（石碑）について

＊ 現在では「佐井寺」が一般的ですが、山田大臣が伽藍の建立に功があったため「山田寺（さんでんじ）」と呼ばれています。本稿では「山田寺」を使います。

当寺の正面入口石段を登りつめた右側に「下馬」と刻んだ約二尺ばかり（約六十センチ余）の石標が建っている。一見古いお墓のように見えるがそうでもない。形が小さくて人々の目にも止まりにくく、風化されてはいるが、刻まれた文字はうすく見えている。

裏側には「応安元年朝見六所」の八文字が刻まれているがうすくて見えがたく、茶瓶から水をそそいでようやく判読出来た始末である。

これがいつ頃どこに建てられたものか、また当時の状況等にはなんら手がかりとなる文書らしきものもなく、詳しく知る由もないが、これが史家の何らかの参考にでもなれば幸甚である。

この碑に関しては次のような一挿話がある。

数十年も前のこと、「山の谷」へ通ずる山路の通称「地蔵塚」に三抱え以上もある大きな松があった、村人はこの松を一本松と称えていたが、惜しいことに今は朽ちてその面影はない。けれど今でもこの辺りを「一本松」との地名が固有名詞のようになっている。

その真下（標高三十メートル以上もあると思う）に小池がある。問題の石碑が半分に折れて、泥水に埋もれてあるのを、数十年も昔のこと、現在は八十才になられる田中作次郎さんが泥さらえの折に発見された。一体これが何に使われていたものかは判らぬが、ただものではないことだけは直感して、池より引き揚げて、前の山田寺住職に示したところ、「大切なものをよくぞ持って帰ってくれた・・」と大へんな喜びようであったそうである。早速と位置を決め、セメントで継ぎ合わせて安置されたものである。

当佐井寺周辺は大阪から至近距離であり、日帰り行軍のできる便利さもあってか、早くから第四師団の郊外演習の一部に充てられておったらしい。丘陵あり、樹林あり、池も多数に散在し、演習地としてはまことに好適地だったのであろう。

春といわず夏といわず、あまりにもよく利用され過ぎ、もう珍しさも通り越して、村人からも随分と迷惑がられていたのではなかろうか。田中さんの若い頃（四、五十年前）には、輜重兵、騎兵等が、足繁くこの山田寺へ来てはよく馬をつなぎ、時には鐘撞堂の四本柱へつなぐ等、村人をして危惧の念を抱かしめたことも度々であったらしい。

ある日の昼休み時のこと、隊長の一中尉が、今まであまり誰にも気附かれなかった、この石標に目を止めて驚き、早速と向かい側の伊射奈岐神社の馬場の方へ全部隊を移してしまい、村人達をホッとさせた。

考えてみれば、田中さんが、この騒がしい馬の群れを、山田寺から遠ざけてくれたともいえる。そして鐘撞堂の危機を救ってくれたことにもなる。田中さんは隠れた恩人の一人とも言えるのではなかろうか。

あらあらしい気風の持ち主の多かった当時にも、たとえ階級は低くとも文武両道を心得た、情操の豊かな武人もあったことを心強く感じられ、ほほえましい心地がすると共に、その武人の人柄の良さがよく偲ばれる。

岸部寄りの「竜ヶ池」をはさんだ地域だけに限らず、時に応じ村中の各所へ移動して射と撃場が設けられたらしく、勿論交通は遮断され、危険は除いてあったであろうが、時たまには的外れの銃丸が、ビューンと頭の上をかすめ、ヒヤッとさせられたことも屡々あった、と元農家の方々が聴かせてくれた。

現在の神社境内は昔の兵士達に代って、時おり吹田高校生達が、地形の変化に富んだ此所を利用して、各種の運動の訓練に励んでいることをよく見受ける。何か時代の移り変りをよく見せてくれている。

これを機会として、今後様々な事柄を聴かせてもらい、今までにあまり知られていない、当時の口碑、伝説、物語等、一つでも沢山まとめてゆきたいと思って

いる。

（三五・八・九夜）

昨秋吹高に、清田先生をお訪ねした折、拓本に関してご造詣の深い羽田稔先生のお写しなされたのによると、

朝見六所（□□）宝前
応安元戊申年（□□）廿日

戊（つちのえ）はハッキリしているが、申（さる）の方はハッキリとしない。先生に調べていただくと「申年」に当たるそうである。右十三文字の刻銘は、何を意味するものであろうか。応安元年（南朝の正平二十三年）は本年より五百九十年前であることだけは判ってきた。

吹田市ご在住の専攻諸先生の御研究下さることをお願いいたしたい。（三九・一〇・一）

上は山田寺鐘楼、左は下馬標の刻銘部分

地蔵塚へ行く

陽射しの鈍い師走の二十三日、汗のにじみ出る午後、田中さんにお願いして同道していただく。先ず西稚児（方言では「にちごう」と称えている）の入口にある、石の道標を左へ曲がる。これが昔から片山方面へ行く道で、道巾は四尺（約一メートル半）程、行くこと百メートル位で道を右に入ると、道らしい道ではなく、熊笹が一面に生い茂っている。田中さんはそれでも平気、さすがは幾十年間歩き廻られ、佐井寺の隅から隅まで知らないところはないらしく進まれるけれど、私は内々不安の思いでついてゆくと、早や地蔵塚の頂上ドームの真下にささやかな池がある。これに類似の小池が周辺に数ヵ所もあり、みんな段々畑の養い池の役割を果たしていたものである。

この池を私は記録に残しておきたいばっかりに、田中さんに無理をお願いした次第である。

氏の説明によると、この池は二十年か三十年目に、一度は泥さらえをする「しきたり」があり当時の仲間の人々とさらえた際、泥中深くにあの「下馬」石が、二つに割れて沈んでおったのを発見して、拾い上げて山田寺まで運ばれたのである。

このことを数年前田中さんより聴かされた時から、不審に堪えなかったのである。現在でも疑問は解けない。約六百年前に建立されたこの下馬標が、小高い頂上、高さ三十メートルもの小池に、どうしてはまり込んだものであろうかが判らない。後生史家の御研究を期待してやまない。

この地形から判断しても、碕井（さい）寺の境域のいかに広大なものであったかが推測できる。

この地蔵塚は独立（か孤立）した一つの丘で、以前は佐井寺所有であったが、「山の谷」の先代の岸田氏に売却、それを一昨年か吹田市が買収して、市の上水道貯水池として、現在のドームが作られたものであろう。

通称一本松もこの頂上ドームのある所にあったそうである。数十年前に田中さんが約二ヵ月間、大阪府技師沢井さんの測量助手として、毎日毎日ついて廻ったこと等々、話はなかなかつきない。

天気の良い日には大阪湾の水が光って白く見え、前面近くに大阪城天守台、新世界通天閣も見え、東には生駒連山がハッキリと見えるそうである。元和の役に徳川方の見張所となったことも肯ける。

ついでに地蔵塚の由来に就いて記しておこう。

（一）古書に曰く、地蔵堂同所にあり、昔この地に光明赫然たり、これを穿（うが）ち見るに地蔵尊を得たり、即ち茲に安置す、出現の地を今「地蔵塚」と呼ぶ。

ある一説に曰く、（二）大字佐井寺南方四丁にあり、大字片山を境とす、谷より聳え（そび）えたる孤嶺なり、昔古松一株有す、名高き雅松なりしも今はなし。（三）由緒古昔天平年中、僧行基佐井寺草創のとき、茲に憩いたりしが光明赫然たり、これを穿ち見るに地蔵尊を得たり、即ち茲に舎堂を創建して安置す。その後年歴不詳、伊射奈岐神社境内に移し、其跡を地蔵塚と称す、然して明治初年伊射奈岐神社より山田（さんでん）寺本堂に移す。

また中古、慶長年間、徳川家康、大坂夏、冬の陣の際、時々鷹狩りに来たり、茲に憩いたりしを以て俗に「権現の松」ともいう云々。

（三九・七・一九）

「にちご公園」より給水塔を望む。原文にある熊笹の繁る荒れ地の面影は全くない

おかうずゐ池

山田寺の裏手道を隔てた、伊射奈岐神社の真下に当たる所にささやかな水溜まりがある。幾世代か以前のこと、同寺の近くに住む主婦が、或る日ひそかにむつき（おむつのこと、ふんどしの意味もある）を洗濯すると忽ち眼が悪くなり、主婦は「これは観音様の祟りである…」と気がつき、すぐさま池水をきれいにさらえ、観音様にひれ伏して謝罪し、その他種々と手をつくしたがなおらない。以後代々の家族も皆眼を患ってなおらなかった…と伝え聞いている。現在は家族皆死に絶えているとか。

この話もただ迷信といってしまえばそれまでであるが、素朴な村人達の中には、これを信じておらるる人もあるやに聞いている。がこれも理由がないでもない。

そもそも佐井寺の「おこうずい池」は、古来眼病にはよくきいてくださるご本尊、十一面観世音の池として最も神聖視され、村人達の信仰の対象ともなっていたもので、この話も宗教信仰と結びついた、この土地の伝説として後世に残しておいても、決して差しつかえないもの…と思う。

伝説というと、何だか根拠のない、とるに足りない、ばかばかしいものの様に軽視されがちの現世相を私は

悲しく思っている。

我々は伝説の中から幾多の貴重な暗示を得て教えられるところ頗る多く、「心のふるさと」として我々の心を温め育み、情操教育の一端を担ってくれているものである、と常々考えている。

即ち、この心が自分たちの住む郷土愛を、知らず知らずのうちに養い、ひいては、国を愛するようになる素地を、作るようになることを確信している。

伝説というものはあまり難しく科学的に分析しないで、そうっと温存しておいて欲しいものである。

古老の話によると、数十年前に村人達の奉仕で防火用にもと、池さらえをしておいたところ、三十年前の頃、池の近くの家に火災が起こった時、この池水が大変によく間に合い、近隣へも拡がらずに済んでくれたとのこと。現在の池は泥砂がたまって火急の際には、殆ど用を果たさないありさまである。まことに惜しい極みである。

眼まぐるしく移り変わりつつある世相の今日此頃、ただ雑草の茂るに任せ、池という形体のみが残り、深く刻み込まれた、「おかうずゐ池」の六文字の石柱は、斜めに傾き、幾星霜を語り顔に立っている。

（三七・八・一三）

現在碑は真っ直ぐに立っているが、池は完全に干上がり、水仙が黄色い花を咲かせていた。

佐井の清水について

「当時水乏しければ、行基菩薩これを祈り給えば、霊水こんこんと湧（わ）き出し、眼疾を濯（あら）えば、忽ち平癒して明らかなり」（摂津名所図会より）

その場所は、行基山（現在の愛宕山）の北方の麓にあり、古く天平年中、僧行基が佐井ヶ原の佐井寺を開基の時、山の水乏しかりしにより、行基の祈祷によって、香水こんこんと湧き出したという。それ以来「佐井の清水」と名づけられたという。今もなお清水絶えず、等々が古書に誌されている。昔はこの清水水源も愛宕山も、皆境内地であったのである。

ところがこの神聖なるべき筈の浄域が、柴や薪の置き場となっていた。数年前の春の或る日のこと何心なく蓋石に耳を寄せると、しずくのしたたる音がして、その音色は松虫鈴虫の声にも優り、また妙なる天来の楽のごとき、ひびきにも似ているようにも思え、しばらくは何ごとも打ち忘れ、じっとかがんで聞き入っておった。

このことを知ったわれわれのグループの某氏はその音を聴き

法（のり）の世の迦稜頻伽（かりょうびんが）の鳴く声か　佐井の清水のしたたる音は

と詠んでくれた。

なんとわが意を得た適切な、現世俗を超越した、永遠に尽きない生命力の溢るる読み方であろう。満腔（こう）の謝意を表しておく。

荒れ果てていたこの霊域も、昨年お寺の尽力で修復され、元の姿にかえり清々しくはなった。霊水もよく通るようにはなってくれたけれど、懐かしいあの"したたり"の幽玄な音は、もう聴かれなくなってしまい、私をして悲しい、もの寂しい思いにさせた。

その上近頃土地の人により、霊泉の源であるこの山の「横」と「うしろ」とを削りとられ、哀れな残骸を見せ、あるいは由緒あるこの霊泉も渇れているのではないか・・・と不安に駆られている。

ついでに言っておこう。愛宕山山頂の小祠に祀ってあるのは「日之迦具土神」で、往古広大であった碕井寺の火を守ると共に住民をも守る大切な神様であり、昔から住民の信仰の対象物体となっていたものである。この行為に対して私は少し理解できにくいものがある。

この愛宕山と由緒と伝説に富む佐井の清水を、町の皆さん方の協力で、いつまでも温存だけではなく、顕彰に心がけ、より多くの人々に認めてもらえるよう、一層の努力をしてほしいものである。（三八・五・二八）

佐井寺境内にある「清め」をする手水場。この水は、「佐井の清水」として現存する唯一の水である。わざわざ汲んで持ち帰る人も多い。

向い峠のお地蔵様

佐井寺から原、岸部方面への出口の所を、「向かい坂峠」と呼んでいる。その頂点の右側約百坪（三百三十平方メートル）位の平地（たいらち）に、一尺（約三〇センチ）にも足りない小さな、十三体の真新しい赤い前垂れ姿の地蔵様が、一列に行儀よく並んでいる。村人はこれを「村のはずれのお地蔵様」と愛称し、子供達からは特に親しまれていた。

今では想像もつかないが、昔は現在の道路面より十尺（約三メートル）程も高く、道幅も狭くて坂の曲がるところの土手に、大きな栗の木が繁っていた。夏ともなれば蝉時雨（せみしぐれ）賑やかに、子供達のよい遊び場所だけではなく、道行く人々の良い憩いの場所であった。秋の栗拾いも、いたずらっ子の憧（あこが）れの的でもあったらしく、なかなか見晴らしのよい「村のはずれの峠みち」に相応（ふさわ）しいところであった。

今でもお地蔵様周辺の草はきれいに刈られ、掃除のよく行き届いているのが目立つ。

毎年八月二十四日の地蔵盆会当日の宵になると、有志から寄贈された、沢山の可愛らしい提灯が、吊りめぐらされて明るく、そのやわらかい光りが、くさぐさ

のお供えものに映えて一段と美しく、お年寄りや少年少女をまじえてにぎやかにご詠歌の回向が始まる。この行事は毎年繰り返し祀られているが、それには悲しい物語りめいた秘話がある。

もう幾十年も前のこと、山中某氏他二、三の方々が、万陀羅山の向かい坂よりの、麓の野菜畑を開墾していたところ、鍬の先にカチンと当たるものがあり、なおも掘り下げると、次から次へと石塊（くれ）が出てきたので、判らないままに、みんなで土をきれいに落とすと、小さなお地蔵様だったのでおどろき、早速と有志が相談の結果、その近くを地ならしして一列に安置し、懇ろな回向を勤めた。

ところがどうしたわけか、いつごろのことであったか、このお地蔵様を、近距離の現在の位置に移した。するとこれを運んだ方々の内の一人が、死因の判らないままに急死された。

それからというもの誰いうともなく、「地蔵さんを動かした祟り」との噂の広がりに怖れをなし、村人達が相寄り回向して、その霊を慰めたと聞いている。

それ以来地蔵盆会の回り来る度毎に、有志の人々が懇ろな法要を営み、御詠歌の奉納など今もなお、変わりなく続けられていることを知り、村人達のこの優しい心根に、私はいたく心を打たれた。

このお地蔵様の前に面した道路は、今から数年前に十二メートル（約六間半）幅に拡がり、道路面も三尺（約一メートル）余り切り下げられて、人、車ともに通行が楽になり、やがては千里ニュータウンとの連絡もでき、待望のバスの往き来の始まる日もそう遠くはないであろう。

峠の下り坂左側の土手に「岸部〇丁、原〇丁」と刻み込まれた道しるべが誰のいたずらか半ば頃から折れて、久しく風雨にさらされてあったが、いつの間にやらその姿を消してしまって、拓本も採れずに終ったことは、かえすがえすも寂しい限りである。

近くには日本最初の名神高速道路も完成して、去る七月中旬より開通し、車の往き来もよく見えて、世の移り変わりの激しさをよく物語っている。

けれどこのささやかな美しい行事は、今後幾世代を経るとも繰り返し、勤行されるであろうことを信じ、こころひそかに念願する次第である。（三八・八・二五）

付．向い峠のお地蔵様こぼれ話

20浅野倉平さんには本稿編集中に再度現地で調査して頂きました。本文では約百坪位の平地（たいらち）とありますが現在は四十坪位、お地蔵様の後方、原本の写真では草の茂った荒れ地に見える部分には、ブロック塀がそびえ、住宅が建っています。

前ページ下部の写真をご覧頂くと中央にやや「大きめのお地蔵様」があり、向かって右側に六体、左側に七体のお地蔵様が写っています。全部で十四体、本文では十三体とあるのに何故？でしょうか。

下の写真は浅野さんが真ん中の「大きめのお地蔵様」に手を合わせて拝んだ上「まえだれ」を外させて頂いて撮影されたものです。上部のお地蔵様の両側に「右吹田」、「左きしべ」の文字がハッキリと見えます。

下部にはハッキリとしませんが「すいた歴史散歩」を参考にすると享和三(1803)年・文化七(1810)年の年号と「童子　西信」「教圓」の二法名が刻まれており、この石造物は道標、お地蔵様、それに供養塔を兼ねてこの辺りに昔からあったもののようです。

左右にある合計十三体は本文にあるとおり地中から掘り出されて最終的に現在地に安置されたものです。

考えられるのは次の二ケースですがどちらでしょうか、現在の所謎のままです。

一．先ず「大きめのお地蔵様」があってその両隣に掘り出した十三体を安置した

二．十三体のお地蔵様の間に、後世、近辺にあった（インターネットで筋向かいに設置されていたとの記事をみつけました）「大きめのお地蔵様」を割り込ませた。

本文では全く別の『「岸部〇丁、原〇丁」と刻み込まれた道しるべ』とはあってもこの「大きめのお地蔵様」についての記述は一切なく、添えられた不明瞭な写真ではそれらしきものは見えません。

道標・供養塔を兼ねた「大きめのお地蔵様」